

特別支援学校教育実習実施前後における学生の意識の変容について（その1）

山根 康代

畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

Transformation of students' consciousness before and after implementation of teaching practice at special needs school (I)

Yasuyo YAMANE

Department of Education, Faculty of Education, Kio University
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

要約 今日の日本の教育においては特別支援教育の専門性のある教員の養成が求められている。本研究は、特別支援学校の実習に参加する学生を対象に、実習前後における意識の変容について調査した。実習前には多くの学生に不安が生じていたが、実習後にはほとんどの学生の不安が解消されており、特別支援学校の実習は実際に障害のある児童生徒との触れ合いが不安を軽減する大きな要因になることが示唆された。また、事前指導において通常学校の実習と特別支援学校の実習とは異なるものであると認識させておくことも大切である。指導案の作成については、事前に学ぶことで実習前の不安の軽減につながることを示唆された。

Keywords：特別支援学校教育実習、意識の変容、事前事後指導

I はじめに

今日の日本の教育において、平成24年に出された文部科学省中央教育審議会の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（答申）」により、「共生社会」の形成に向けて教育分野においてはインクルーシブ教育システムの構築が進められ、通常学校における特別支援教育への理解・認識の高まりがみられている。さらに、インクルーシブ教育の推進を目指した制度改革も順調に行われる中、通級による指導を受ける児童生徒の増加等、特別支援教育を巡る状況は大きく変化しているところである。通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備の推進が進められている。また、文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」(2022)では、小中学校における「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す」児童生徒の割合は8.8%となっており、通常の学級における特別支援教育を必要とする児童生徒は増加傾向にある。さらに「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校にお

ける指導・支援の在り方等に関する有識者会議（審議のまとめ）」(2022)では、「2E（twice-exceptional）の児童生徒」と言われる、特異な才能と学習困難を併せ有する児童生徒の存在も指摘され、このような児童生徒が通常の学級に在籍していることや、障害の程度によっては、通常の学級に在籍しながら通級による指導を受けていたり、特別支援学級に在籍していたりすることも考えられるとし、このような児童生徒の指導・支援も教員に求められている。

文部科学省中央教育審議会『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』(2021)の中で、「新時代の特別支援教育の在り方」において、小中学校における障害のある児童生徒の学びの充実、さらには高等学校における特別支援教育の充実が謳われているところである。そして、『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師像と教師に求められる資質能力」の柱に「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」が示され、全ての教師に特別支援教育における専門性の向上が求められている。教員養成を行う大学では、既に令和元年度から特別支援教育に対応した科目の必須単位化が行われている。都道府県

教育委員会等においては、特別支援教育に係る資質を教員育成指標全般に位置付けるとともに、体系的な研修の実施が求められている。また、採用に関して、特別支援学校教員免許状を有している学生において優遇措置を取っている自治体が多く、各都道府県において特別支援教育の推進を図っていることがうかがわれる。特別支援学校の免許状保有率においては、「令和3年度特別支援学校教員の特別支援学校教諭等免許状保有状況等調査結果」(2022)によると、特別支援学校教諭免許状を保有している割合は、86.5%であり、前年度よりも向上している。特別支援学校新規採用等教員については80.3%の保有率である。特に新規採用者においては平成23年度は59.9%の保有率であり、保有率の向上が著しい。つまり、多くの教員養成大学において特別支援学校教員免許状を取得する学生が増加していることがわかる。一方で、特別支援学級担任の免許状保有率においては31.1%であり、平成23年度の31%と比較してもあまり向上していないのが現状である。

現在、特別支援学校教諭免許状を取得できる大学においては、「教職員免許法施行規則の一部を改正する省令の交付及び特別支援学校教諭免許状コアカリキュラムの策定等について(通知)」(2022)が出され、特別支援教育を担う教師の養成の在り方等について、コアカリキュラムの策定等が要請されており、特別支援教育における専門性の向上が重視されている。

畿央大学教育学部現代教育学科においては、教職必修科目の単位を修得すれば、小学校教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状(英語、数学)、高等学校教諭一種免許状(英語、数学)、幼稚園教諭一種免許状、特別支援学校教諭一種免許状(知的障害、肢体不自由、病弱の3領域)、養護教諭一種免許状が取得できるとともに、保育士の資格についても取得できる。特別支援学校の教員免許状を取得するためには、幼稚園、小学校、中学校、高等学校のいずれかの免許状を基礎免許として、指定された特別支援教育に関する科目の単位を取得する必要がある。本学では特別支援学校教育実習は4年次に行う。ほとんどの学生が近隣の府県で実習を行うことが多い。また、実習受入校においては、実習生の受入体制を整え、指導教員や配属の学部学級を決め、実習開始前にオリエンテーションあるいは事前指導を行い、効果的な教育実習が実施できるよう十分な配慮をしてくださっている。また、大学の訪問指導にも快く対応してくださっている。しかし、各特別支援学校においては、児童生徒の障害の重度重複化・多様化、教員の業務多忙化、新型コロナウイルス感染症防止対策など多くの課題を抱える中での教育実習の

実施であり、受入人数を制限せざるを得ない現状でもある。一方で、特別支援学校教員免許状を取得できる私立大学は増えており、免許状を取得したいと希望する学生も増加傾向にあると思われる。また、新型コロナウイルス感染症の影響で、今まで実施可能であった特別支援学校における学習支援ボランティア等の受入が困難であったり、制限されたりして、本学では教育実習で初めて障害のある子どもと触れ合う学生が多くなっている現状である。

そこで、これらの現状における本学の特別支援学校の教育実習に対する学生の意識を教育実習に対する不安や学びについて調査し、その結果に基づいて、必要な改善等を検討し、より充実した特別支援学校教育実習の実施を目指していきたいと考えた。

II 調査の概要

1 調査の目的

本学科学生の特別支援学校教育実習の事前・事後指導において特別支援学校教育実習に関する学生のアンケート調査から学生の教育実習への取り組みに対する実態や教育実習前と実習後での意識変容について明らかにするとともに、本学科における特別支援教育実習の課題について考察し、その改善・充実に目的とする。

2 研究の方法

本学科で特別支援学校の教育実習を選択した学生(38名)を対象に実習が始まる前の5月での事前指導時と全ての学生の実習が終了した12月での事後指導時に多肢選択法と自由記述法を併用したアンケートを用いて調査を実施した。その結果、38名の学生から回答を得られた。多肢選択法では、集計後にその割合を求めた。また、自由記述法ではKJ法により記述内容を各グループに分け、それぞれを集計し、その後同様に割合を求めた。なお、一連の分析過程においては、筆者と特別支援教育に携わる大学教員1名で、協議しながら記述内容のグループ分けの妥当性の検討も行った。

3 倫理的配慮

対象学生には、本研究の趣旨と倫理的配慮について口頭にて説明を行い、了解を得た。また、集計においては個人が特定されないように配慮し、研究データの取扱についても厳重な管理を行った。なお、本研究の実施においては畿央大学研究倫理委員会の承認を得ている。(承認番号R4—47)

Ⅲ 結果

対象学生に対するアンケート調査は事前指導時の実習前アンケートと、事後指導時の実習後アンケートに分けて、結果をまとめた。

1 実習前アンケート

①実習前の不安について

実習前への不安は図1の通り、「大変不安がある」「不安がある」の合計が84%もあり、対象学生の特別支援学校教育実習に対する不安の強さが認められた。

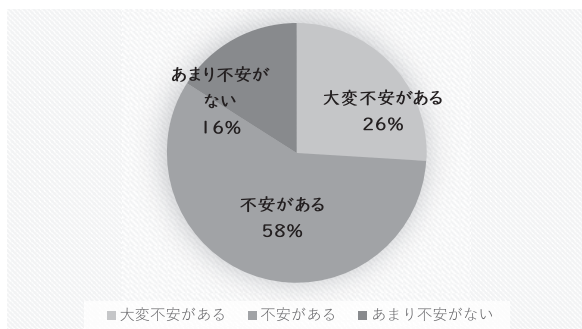


図1 実習前の不安度

前問に係わって、不安の内容を図2に示した。多くの学生が、児童生徒と関われるかどうか、特別支援学校の授業ができるかどうか、指導案が作成できるかどうかという教育実習の基本ともいえる内容について不安を抱いていた。また、特別支援学校のイメージがもてず、実習自体に漠然とした不安を抱える学生も多かった。

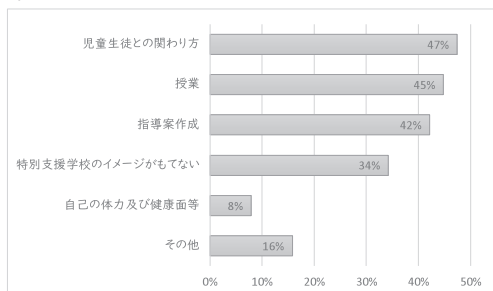


図2 不安の主たる内容

②実習前に準備しておきたいこと

不安を解消するために、自分自身で準備しておくことについて、その内容を調べた結果が図3である。「授業についての勉強」では、「特別支援学校の授業を参観したことがなくイメージがもてないのでインターネット等を活用して調べておきたい」、「模擬授業を行ったことがないので、どのような授業を展開してよいかわからないので、調べておきたい」などの意見が多くみられた。「指導案についての勉強」では、「小学校の指導案は大学の授業で作成したことがあるが、特別支援学校の指導案は作成したことがないので、教育センターなどのHPを確認して指導案について調べて

おきたい」などと記載している学生が多かった。また、「障害についての勉強」では、「実習先の主たる障害種について再度勉強をしておきたい」「大学での講義資料を見直しておきたい」などの記載があった。

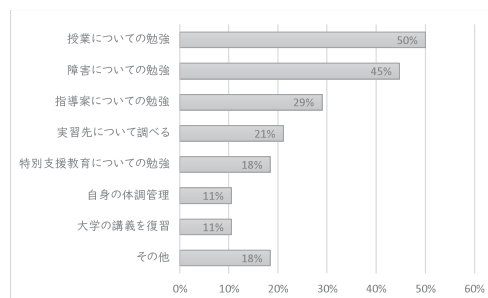


図3 実習前に準備しておきたいこと

③教育実習に期待するもの

次に教育実習に期待するものの内容について調べた。児童生徒とのかかわりを不安に思っている学生が多い一方で逆に児童生徒とのかかわりに期待する学生が多いことが認められた。また、実習前には、将来自分が小学校の教員になることを希望しており、その実現のために特別支援学校での教育実習を行う学生も11%いた。

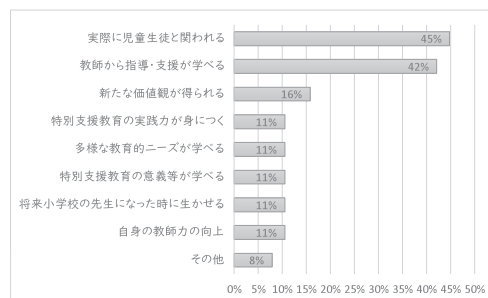


図4 教育実習に期待するもの

④特別支援学校教育実習から学びたいこと

特別支援学校教育実習から何を学びたいかを尋ねた質問では、「児童生徒との関わり方や指導・支援の方法」について、89%の学生が学びたいことに挙げていた。例えば、「障害のある児童生徒にどのように関わるとよいか知りたい」、「授業中における子どもたちへの支援方法について学びたい」などの意見が記載されていた。それに比して「授業の仕方について」は、「自立活動について学びたい」など具体的な領域等が示されている記載はあったものの29%の学生しか学びたいこととして回答しなかった。

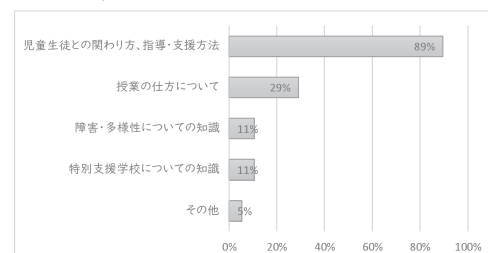


図5 特別支援学校の教育実習で学びたいこと

⑤実習中に特に配慮しようと思っていること

実習中に特に配慮しようと思っていることについては、「児童生徒との関わり方」について、55%の学生が答えていた。記載内容としては、「生活年齢に応じた態度で接したい」、「支援しすぎないように自分の力で子どもたちが活動できるように気をつけたい」などが認められた。一方で、同じく半数弱の学生が「実習生としての態度や礼儀」、例えば「あいさつを進んでする」や「積極的な態度で実習に取り組む」や「わからないことに対しては積極的に質問する」などを回答していた。

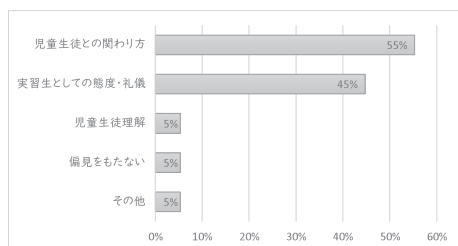


図6 実習中に特に配慮しようと思っていること

これらのことから、対象学生は特別支援学校教育実習においては児童生徒の関わりや授業の実践、指導案の作成等に関する不安を抱いており、特別支援学校の授業や障害の特性、指導案等について、実習前に準備をしておきたいと考えていた。また、特別支援学校教育実習に期待するものは児童生徒との関わり方や指導・支援の実践が経験できることであり、特別支援学校教育実習から学びたいことも同様の結果であった。

2 実習後アンケート

①実習前に抱いていた不安の解消について

実習前に不安を抱いていた学生がほとんどであったが、実習後にその不安が解消されたのかどうかについては95%の学生が不安は解消されたと答えていた。

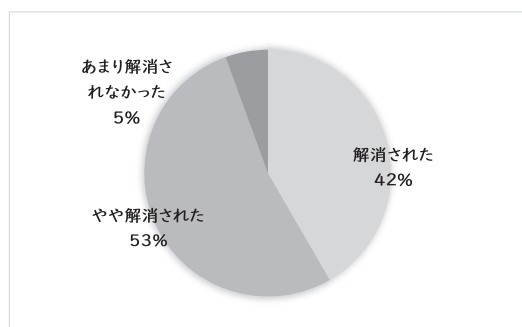


図7 実習前に抱いていた不安の解消について

②実習後に新たに生じた不安について

ほとんどの学生が実習後に抱いていた不安は解消したもののさらに新しい不安が出現したかどうか尋ねると約半数の学生が新たな不安を抱えていることがわかった。

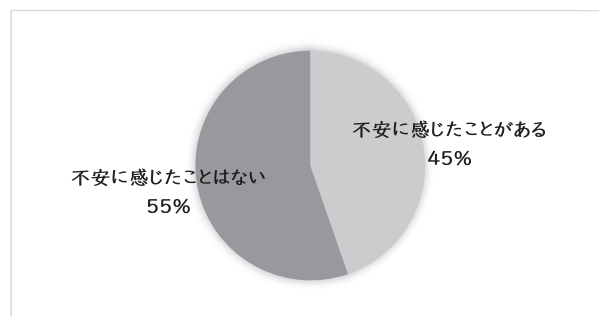


図8 実習後に新たに生じた不安について

③実習後に生じた新たな不安の内容について

実習後に感じた不安の内容については、実習先の個々の特別支援学校によって異なるためか、その他が一番多くなったが、「教師間の人間関係」、「個に応じた指導や支援方法」、「保護者への対応」、「医療的ケア児等（重度の障害のある児童生徒）との関わり方」など多くは職場の人間関係やコミュニケーションに関する内容について新たな不安が生じていることがわかった。

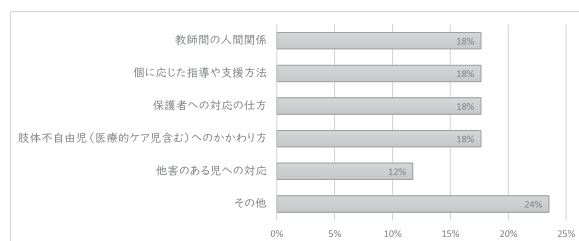


図9 実習後に生じた新たな不安の内容について

④実習前に準備しておくこと

実習前のアンケートでは全ての学生が実習前に何らかの準備をしておくとして回答していたが、実際に実習を行ってみてどのような準備が必要であったかを尋ねた。まず、準備が必要かどうかを尋ねたところ、92%の学生が準備をしておいた方がよいと回答した。なお、準備しておいた方がよいと思った内容については、図11のとおりである。

指導案作成ができるように調べておいた方がよいと答えた学生が60%であった。なお、「子どもとの直接的な関わり」とは、実習で初めて障害のある子どもたちと関わるのではなく、実習前に直接的な関わりのおもてなしをしておいた方がよかったという意見もあった。

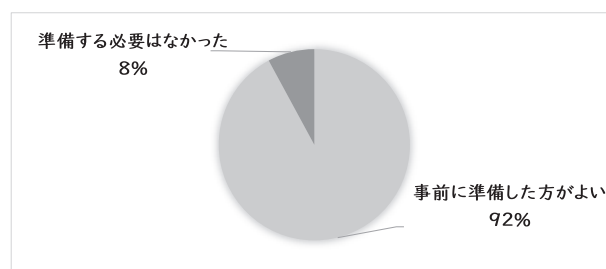


図10 実習前に準備しておいた方がよいと思ったことの有無

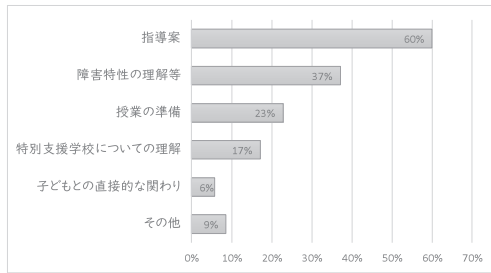


図1-1 実習前に準備しておいた方がよいと思った内容

⑤実習を通して得られたもの

実習中に期待していたものは得られたかについて質問をしたところ全ての学生が期待したものが得られたと回答した。そして、実習を通して得られたものについてその内容を質問したところ、児童生徒の関わり方が理解できたと答える学生が66%であった。また、特別支援教育のやりがいや楽しさを感じた学生が26%であった。

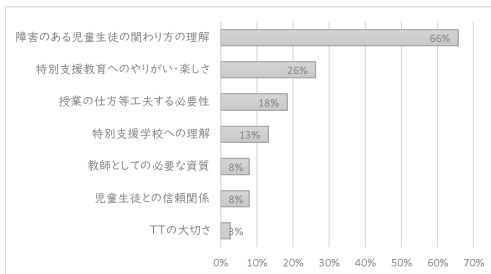


図1-2 実習を通して得られたもの

⑥実習を通して学んだこと

本質問では特別支援学校の教育実習を経験することで学んだことは何かを尋ねたところ、「障害のある児童生徒への指導・支援」が8割近くを示した。例えば、「言葉での理解が難しい子どもに対し、見通しがもてるように『絵カード』の活用が効果的であることが分かった」、「同じクラスでも子どもによって関わり方を変える必要がある」、「わかりやすいコミュニケーション方法」などの記載がなされていた。

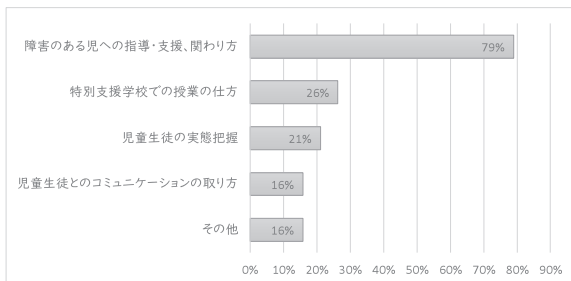


図1-3 実習を通して学んだこと

⑦実習中に一番配慮したこと

一番配慮したことは児童生徒への関わり方であり、68%の学生が回答している。また、その他も児童生徒に係ることがより多かった。

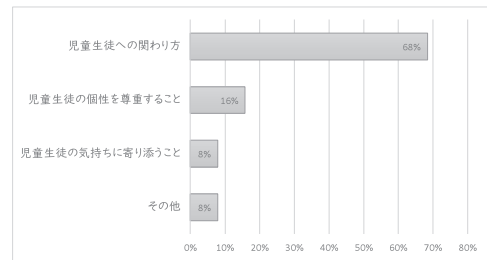


図1-4 実習中に一番配慮したこと

⑧他の実習と異なると感じたところ

特別支援学校の教育実習は他に基礎となる免許状が必要であり特別支援学校での実習を実施した全ての学生が他校種の実習を既に経験していた。そのため、他の学校種との比較は容易であったと思われるが、「授業内容やその在り方」では、「教科書を使用しない学習があった」「教材研究や事前の準備を丁寧に行う必要がある」などの記載があった。「学校生活における一日の流れ」などは、「1週間帯で取られている授業があった」「授業時間が短い」などが記載されていた。「教師の仕事内容」では、「生活における介助も行わなければならない」「複数の先生と一緒に授業をすることが多いため打ち合わせの時間が多く必要である」などの記載が見られた。「個を大切に指導」では「一人一人に応じた支援がなされていた」などの記載があり、様々な点から他の実習と異なる点として挙げられていた。

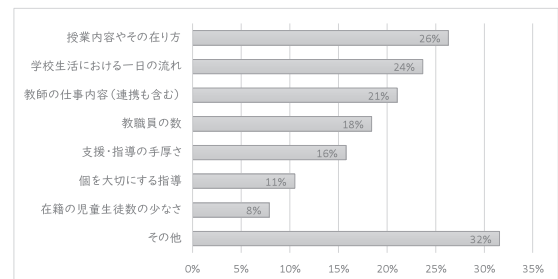


図1-5 他の実習と異なると感じたところ

⑨実習後に感じた自分自身の変化

実習終了後への自分自身の変化について質問をした。「障害のある子どもたちへの関わり方」が変わったという学生が32%いた。記載内容には「障害の特性に応じた関わり方ができるようになった」「すべてを支援するのではなく、じっくり待つことができるようになった」などの記載があった。また、小学校の教師を目指していたが、特別支援学校の教師になりたいという思いが強くなったという学生が18%存在している。さらに、特別支援教育に対する見方考え方が変化したという学生も13%いたが、その詳細については述べられてはいなかった。

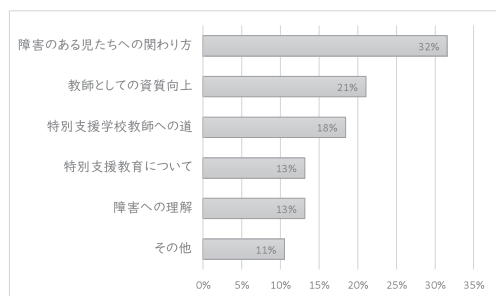


図16 実習後に感じた自分自身の変化

3 振り返りシート

事後指導では、グループワークを行ったが、その際に各自が振り返りシートを記載し、それを元に各グループで話し合いを行った。いくつか関連する項目を紹介する。

①特別支援学校教育実習の実施後にやりがいを感じたこと

53%の学生が「児童生徒の変容や成長を感じられたとき」と回答している。また、16%の学生が「個に応じた支援が提供できる」ことをやりがいを感じており、特に授業に関する内容においてやりがいを感じている学生がいることがわかった。

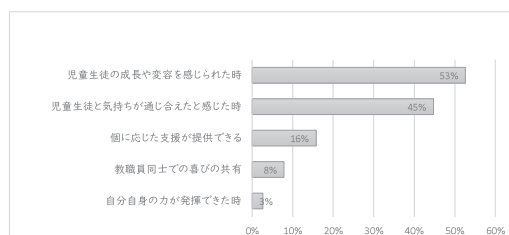


図17 特別支援学校教育実習を実施後にやりがいを感じたこと

②実習を終えてもっと学びを深めてみたいと感じたこと

「様々な障害特性の理解」に39%の学生が学びを深めてみたいと回答した。例えば、「今回は知的障害の子どもたちと関わったので、今度は肢体不自由の子どもたちについてもその特性を学びたい」、「医療的ケア児について学びたい」などの記載があった。また、「児童生徒への支援・指導」では「授業中における効果的な支援方法について学びたい」、「授業づくり」では、「自立活動の授業展開についてもっと学びたい」「教科等を合わせた指導について学びたい」など具体的な領域等が示されていた。また、「ICTの活用」について効果的な活用方法を勉強したいと述べている学生もいた。

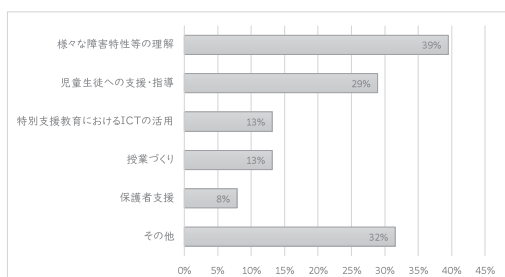


図18 実習を終えてもっと学びを深めてみたいと感じたこと

これらのことから、多くの対象学生は実習前の不安が解消した一方で、実習後には約半数の学生が新たな不安を抱えていることが認められた。新たな不安は教師間の人間関係、個に応じた児童生徒の指導・支援、保護者への対応等であり、特別支援学校教育の特色に関することであった。また、事前に準備しておいた方がよいことは実習前は一番割合が高い授業のことについては50%を示していたが、実習後には同様に指導案のことが60%を示していた。実習を通して、得られたものは実習前には一番高い不安の数値を示した児童生徒の関わり方であった。さらに、実習を通して、学んだことは児童生徒との関わり方と指導・支援が約80%を示していた。実習後に感じた自分自身の変化については約30%の対象学生が児童生徒との関わり方があげられた。実習後の振り返りで、特別支援学校教育実習でやりがいを感じたことは半数以上の学生が児童生徒の成長や変容を感じられた時、約45%の学生は児童生徒と気持ちが通じ合えたと感じた時であった。また、もっと学びを深めてみたいと感じたことは様々な障害特性等の理解であった。

IV 考察

本研究は、特別支援学校の教育実習に参加する学生を対象に、実習前後における学生の意識の変容について調査した。

教育実習前に、実習への不安を尋ねたところ約8割強の学生が不安があると回答していた。不安の内容については、児童生徒と関われるかどうか、特別支援学校の授業ができるかどうか、指導案が作成できるかどうかという教育実習の基本ともいえる内容であった。特別支援学校の教育実習は基礎免許状の教育実習終了後に行われる。つまり、何らかの校種の実習を既に終えているにも関わらず、実習の基本と言える内容の不安が多いのは、「特別支援学校」のイメージがもてていなかったり、特別支援教育の実際を経験していなかったりしたため、不安を感じてしまう学生が多かったのではないと思われる。つまり、通常の学級における教育実習であれば、学生自ら教育を受けた経験があるが、特別支援学校においてはそのような経験がほとんどないため、「特別支援学校」のイメージそのものが学生にとっては描きにくいと思われる。不安の内容については経験不足が要因となっているものが多く、このことについて、高良（2021）は、ボランティア活動等により教育実習前に障害のある子どもたちと接する機会が特別支援学校の教育実習に与える効果が大きいことを述べている。本学においても特に、この

2022年度に教育実習を経験した学生たちは大学生生活に慣れ始め、そして、専門教科科目の履修が開始される2年次より新型コロナウイルス感染症の影響でオンラインあるいはオンデマンドの授業が中心となった学生たちである。そのためボランティア活動やインターシップ等の参加にも制限が加わり、ほとんどの学生が、実習前に一度も障害のある児童生徒との触れ合いもいままに特別支援学校の教育実習に臨むことになった。そのため不安に思う気持ちも強かったと考えられる。しかし、実習後には95%の学生が実習前に抱いた不安が解消されたと回答している。このことから、特別支援学校の教育実習は実際に障害のある児童生徒との触れ合いが不安を軽減する大きな要因になることが示唆された。また、池田ら（2011）も「特別支援学校での実習においてほとんどの学生が不安を有していたが、実習という具体的な営みを通してほとんどの学生が満足をしたと回答した」と述べられており、それは本学科学生も同様の結果であった。

また、他の校種の実習と特別支援学校の教育実習と異なる点はあったかどうかを尋ねた質問では、授業内容やその在り方、学校生活の流れなど、多くのことが他の実習と異なる点として挙げられた。学生にとっては特別支援学校の教育実習は他の校種とは違うと感じられるものだったと言える。つまり、他の校種の実習をしているからと言って特別支援学校教育実習に対する基礎的な理解が促される訳ではなく、基礎免許を取得する通常の学校の教育実習と特別支援学校の教育実習とは異なるものであると認識させる必要がある。そのためにも、それぞれの障害についての理解と肢体不自由校と病弱校の各教科における配慮事項や知的障害校の各教科の目標や内容及び教育課題について十分な理解を促しておく必要があると思われる。

そして、実習に期待することとして、実習前のアンケートでは「児童生徒との直接的な関わり」や「児童生徒への指導支援が学べる」という回答が多かった。実習後のアンケートでは全ての学生が期待したものが得られたと回答し、「児童生徒との直接的な関わり」が得られたと回答している学生が多かった。しかし、教育実習の意義は「教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である。一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける。」と文部科学省総合教育政策局教育人材政策課教員免許企画室長平野氏は「第36回 大学等

におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム」(2021)において述べている。アンケートに回答した学生たちはコロナ禍において障害のある児童生徒との直接的な関わりの経験が得られなかったため、教育実習が障害のある児童生徒と関わることでできる唯一の機会であり、教育実習に期待するものが「障害のある児童生徒との関わり等」であったのかもしれないが、それは、教育実習の本来の意義とは異なっているのではないかと考える。有意義な教育実習を実施するためには、教育実習の意義や目的について学生にしっかり確認をして準備させておく必要がある。ただし、特別支援学校教育実習から何を学びたいかを実習前に尋ねた質問では、「児童生徒との関わり方や指導・支援の方法」については9割近い学生が学びたいこととして回答していた。実習後の回答で、実習前に学びたいと思っていたことがほぼ学べていることが分かり、教育実習は学生が期待していたものが学べる場となっていたことは示唆された。

また、今回のアンケートにおいて事前に準備しておくことは「指導案について」が高い割合を示していた。実習前の指導案の指導については多くの先行研究にも述べられており、枝元・山本（2017）は事前に授業で指導案についての指導を行うことにより学生の不安の軽減につながったと述べている。また、幼児教育ではあるが、増井（2018）は、事前に指導を行うことにより「指導案の作成」については、一定の効果が見られると述べている。また、和（2019）は事前指導で学生に個別に指導案の添削を行うことにより、特別支援教育実習の実習校評価は、「基本的な実習態度」で高い評価を得ると同時に、課題が見られた「指導案作成・授業準備」において、顕著な改善が見られたと述べており、指導案作成の指導を事前に行うことの有効性が示されていると言える。本学の学生においてもほとんどの学生が指導案において事前の準備が必要であると述べており、大学で事前に十分に指導をしておく方がよいことが示唆された。本研究では実習受け入れ先の特別支援学校にはアンケートを実施していないが、今野ら（2016）は、実習先の担当指導教員にアンケートを実施しており、大学への要望として「指導案作成」と「研究授業」が多数を占めていたことを明らかにしており、本学が受け入れていただいている特別支援学校もそのように感じている可能性が考えられる。

障害のある児童生徒とのコミュニケーションの構築の不安が解消されるとさらに授業中や指導・支援における人間関係の構築の難しさが生じてくると思われる。松本（2022）は、コロナ禍における大学生の生活環境等の変化において、自尊感情の低さなどのメンタ

ルヘルスへの影響について述べている。この調査をした学生もまさにその該当学生であり、対面での授業を行えていない。そのため慣れない環境下における対人関係の構築が難しく、実習後に新たに人間関係やコミュニケーションに係わる不安が生じた学生が半数近くいたが、これらのことが関連しているのではないかと考えられる。その一方で、実習を通して全ての学生が自分自身に何らかの変化を感じており、特別支援学校教育実習あるいは特別支援教育自体が学生に大きな影響をあたえ得るものであることが示唆され、特別支援学校の教育実習が充実していたとも言えよう。これは、今野ら（2022）も同様のことを述べている。

また、和（2019）は、事前授業は、個々の特性に合わせて指導・支援していくことも重要であるとしており、学生の不安の要因を事前に知っておくことによって、より効果的な事前指導が提供できるのではないかとされる。さらに、振り返りシートの「やりがい」について深く省察させることも大切であると考ええる。

このようなことを踏まえ、本学科での教育実習の事前事後指導をより充実させることにより、学生が自信をもってより有意義な実習に臨むことができると考える。藤波（2001）は、「教育実習学の基礎理論研究」の「教育実習の革新」に関する結論の中で、教育実習の使命は「実習生を学校の仕事に対して仕込むことを内容とするのではなく、彼らが反省しつつ、また実際と関わり合いながら学び、理論と実践を意識的に結びつけることを内容とする。したがってきわめて研究的性格の強いものである」と述べている。よって事前指導では、大学で学んだ理論を実践につながるようにしていく必要がある。実践につなげていくためには、学生が個々に課題意識をもち、自らの経験に基づいて考え、さらに、具体的な場面を想定して準備をしていく必要がある。また、そのことを同じ目的をもった他の学生と意見を共有、交換しながら深め、確認していく必要があると考える。そして、自信をもって実習に臨むためにはただ単に理論や知識だけを学ぶのではなく、指導案や模擬授業、実習先の児童生徒の実態などより具体的な事項を学ぶ方が望ましいと考えられる。よって事前指導には一定の時間の確保も必要である。また事後指導では、自分が実習で経験してきたことをまとめたり、発表したりすることにより、自身の振り返りを行うだけでなく、同じ経験をしてきた他者からの情報を交換、共有することで教育実習についての問題や課題に向き合えるものと考えられる。よって、事後指導では個で振り返る場面とグループで振り返る場面を適切に設定し、展開していく必要性もあるのではないかと考えている。

また、個々の学生の経験によっても教育実習事前事後における必要な学びが異なってくるのではないかと考えられることから、個々に応じた指導・支援についても検討をしていく必要があると考えられる。

いずれにしても、一人の教育者として学生を育てていくためには理論だけでも実践だけでも良いわけではなく、理論に裏付けられた実践、実践を裏付けるための理論が必要であり、これらを日々の大学教育の中でどう指導していくかが問われるのではないかと考える。

V 文献

- ・枝元香菜子・山本礼二；事前授業による教育実習不安の変容—教職志望学生のセルフ・エフィカシーに着目して—、高等教育研究、23、11-19、2017
- ・藤枝静正；教育実習学の基礎理論研究、風間書房、2001
- ・池田浩明・小川透・武石詔吾；特別支援学校の教育実習における学生の意識について（1）、藤女子大学紀要、48（11）、125-131、2011
- ・今野邦彦、池田浩明、小川透；特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究（3）—教育実習担当指導教員へのアンケート調査から—藤女子大学紀要、53、73-80、2016
- ・今野邦彦、原田公人、矢野潤；ウイズコロナ時代における特別支援学校教育実習指導、藤女子大学紀要、59、9-20、2022
- ・和史朗；特別支援教育実習事前指導における学習指導案作成の指導、教育・教職センター特別支援教育研究年報第、11、69-78、2019
- ・増井啓子；アンケートから見える教育実習指導の学びと課題—実習事前指導・実習・実習事後指導を通して特別支援教育に関する教育心理学的な研究動向と課題—、奈良佐保短期大学研究紀要、特別、87-101、2018
- ・松本麻友子；新型コロナウイルス感染症拡大による大学生の学習および生活習慣の変化、神戸親和女子大学研究論叢、55、67-77、2022
- ・高良秀昭；特別支援学校教育実習における事前指導に関する一考察—児童生徒の実態把握や合理的配慮の提供の実践を通して—、九州女子大学紀要、58（2）、1-14、2021
- ・文部科学省；共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（答申）、2012
- ・文部科学省；「令和の日本型教育」の構築をめざし

て～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）、2021

- ・文部科学省：第36回 大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム、2021
- ・文部科学省：令和3年度 特別支援教育資料、2022
- ・文部科学省：通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果、2022
- ・文部科学省：特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する 学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議 審議のまとめ、2022
- ・文部科学省：令和3年度特別支援学校教員の特別支援学校教諭等免許状保有状況等調査結果、2022
- ・文部科学省総合教育政策局長・文部科学省初等中等教育局長：「教職員免許法施行規則の一部を改正する省令の交付及び特別支援学校教諭免許状コアカリキュラムの策定等について」通知、2022

